

上原 美術館 通信

No.
14

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2021年7月9日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



作家・谷崎潤一郎は1933(昭和8)年に随筆『陰翳礼賛』^{いんえいらいざん}を著^{あらか}しました。当時は近代化が進み、生活環境が大きく変化する時代でした。電気やガスの普及は、暗い日本家屋の佇まいを大きく変えていきます。谷崎はこうした時代に、陰翳の美とどのように向き合うかを問うています。それは90年ほど経った現在でも変わらぬ課題です。「私は、われわれが既に失いつつある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい」。谷崎の言葉のように、本展では失われつつある陰翳の世界を美術館に呼び返してみたいと思います。

「美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの祖先は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に沿うように陰翳を利用するに至った」。谷崎はそう語っています。今回の展覧会のはじまりとなる近代館第1展示室は日本家屋の暗い部屋に見立てています。受付から薄暗い入口を奥へ進むと、床の間のような空間が広がります。そこには小林古径の掛軸《杪秋》^{びょうしゅう}とともに、ルドンの花々が両脇を飾ります(表紙写真)。ここは両脇の壁を二重にすることで、古径の余白が持つ広がりを受けとめる曖昧な陰翳の空間を生み出しています。古径《杪秋》はシンプルな描写が特徴です。余白の中に

柿の木が一本だけ描かれていますが、暗がりで見るとその余白が掛軸の外へ無限に広がっていきます。掛け軸は「それ自体が装飾の役を果たしているというよりも、陰翳に深みを添える方が主になっている」、つまり「床うつり」が重要であると谷崎は言います。古径の掛軸は陰翳に深みを添え、暗い展示室の空間に溶け込んでいくかのようです。

同じ部屋には平安時代の十一面観音菩薩像が展示され、その脇に須田国太郎の花が捧げられています(写真1)。仏像はかつて暗い屋内で拝まれていました。仏像に施された金箔はそうした空間の中でこそ本来の美しさをあらわします。谷崎は黄金が「遠い遠い庭の明かりの穂先を捉えて、ぼうっと夢のように照り返している」、その照り返しが「あたりの闇へ実に弱々しい金色の明かりを投げているのであるが、私は黄金というものがあれほど沈痛な美しさを見せることはないと思う」と述べています。暗がりで見ると仏像はわずかな光を集めて、自らが静かに輝きを放つかのようです。

須田国太郎は東洋西洋の美の違いとは何かを問い続けた画家です。須田は京都帝国大学大学院を中退してスペインに留学、西洋の古典絵画を持つ陰翳表現を深く学びます。帰国後、京都の日本家屋の一室で制作を続けましたが、影

の中から浮かび上がる花々は、東洋の陰翳と西洋の光が融合するような独特の存在感を放ちます。

奥の部屋に進むと、屋外のような明るい光が降り注ぎます。ここは枯山水の日本庭園に見立てています。左の部屋には山々の絵画、右の部屋には川や海の作品が飾られ、自然を感じさせる箱庭の空間になっています。いつもより絵が低く掛けられており、ベンチに座ると縁側に腰掛けて庭園を見る印象になります。

仏教館に移ると個人の邸宅のように、さまざまな場所に作品が飾られています。竈にはマチスの版画、窓辺には新収蔵となるルノワールの彫刻《小さな鍛冶屋》が展示されています。多目的室では、あたたかな光の中でジャンルや時代を越えた個人コレクションならではの「内なる世界」をご紹介します。中央には新収蔵・初公開となる平安時代の狛犬が佇み、その向こうには須田国太郎による古建築の絵画が並びます。

長い回廊を奥へ進むと、須田国太郎《静物》が再び陰翳の世界へとといざないます(写真2)。ホワイエでは、平安時代の薬師如来像とルオーのキリスト像、花々の絵画がジャンルを越えた不思議な世界を生み出します。

仏教館の展示室もまた、日本家屋の暗がりに見立てています。展示室に入ると左側にはピサロやモネ、ルノワールらの明るい風景画が並びます(写真3)。展示ケースの開口部が低くなったこの場所は、庇が伸びた縁側のようなイメージです。展示室正面は床の間のように小林古径の掛軸《芥川》^{あくとがわ}が一点展示されています。女性の髪や着物の模様、鬼の姿が浮かび上がる闇の描写には、陰翳の中でこそあらわれる古径の卓越した技量を見ることができます(p.5コラム参照)。

右面には小林古径による双幅《道成寺》^{どうじょうじ}をはじめ、愛の物語が並びます(写真4)。「道成寺」はお寺の鐘をめぐる男女の愛憎の物語。一説には二人は法華経の功德により成仏したと言われますが、今回は古径の双幅に当館が所蔵する妙法蓮華経(鎌倉時代)を添えています。

最後に鎌倉時代の阿弥陀如来像が闇の中に浮かび上がります(写真5)。陰翳の中でわずかな光に照らされた仏像の玉眼は滲むような光を湛え、黄金の衣をなびかせてこちらへ歩いてくるかのようです。

今回の展示は通常よりも暗い展示空間が広がっております。その暗がりこそ浮かび上がる陰翳の美をどうぞお楽しみください。(土森)



1. 近代館展示室



2. 仏教館回廊



3. 仏教館展示室左面



4. 仏教館展示室右面



5. 仏教館展示室の阿弥陀如来像

関西には、^{かんんのぼさつ}観音菩薩を本尊とした三十三の霊場があります。西国三十三所^{さいごくさんじゅうさん}観音霊場と呼ばれ、信仰を集めるこの霊場は、京都を中心に、奈良や大阪などに点在し、今も多くの人が各霊場本尊の観音菩薩に手を合わせています。2016年には霊場開創1300年を記念して、特別ご開帳やイベントが行われました。

江戸時代にも多くの人が、この霊場巡りをするため、関西へとはるばる旅をすることが流行りました。当時、誰でも巡拝の旅に出かけられたわけではなく、村でお金を出し合い、代表となった者が5〜10名程度で出かけていたようです。こうした旅は、大都市を通る旅^{ものみゆざん}ですので、参拝ついでに物見遊山も兼ねていました。当時書かれた旅日記を読むと、名物の饅頭を買った、巡拝の道沿いにある名所旧跡を見学してきたなど、楽しそうな様子が伝わってき

ます。また、旅から帰ってきた人々は、観音菩薩のありがたい功德を、遠く離れた自分たちの住む場所にも作りたくて願ひ、霊場本尊を模した仏像や、石仏、記念塔などを作りました。

昨年度、調査を行った伊豆市本柿木・法泉寺に安置される西国霊場本尊を写した木造の三十三観音像(伊豆市指定文化財)は、巡拝から戻った人々が願主となってお寺に納めたものです。本柿木の人々も、江戸時代・明和3(1766)年、西国巡拝の旅に10名程度で出かけています。村へ戻ってきたから、西国霊場の写し^{うつ}を作りたいと願ったのでしょう。古文書によると、仏像は出来たが、思いのほか、お金がかかってしまい、金箔の足りない分を1体につき金一分二朱の寄付をお願いしたい、ということが書かれていました。

巡拝をした人たちが納めた法泉寺の仏像は1体ずつ厨子に入り、立像が像

^{こう}高約30cm、坐像は像高約18cmのもの。像本体に銘文はありませんが、台座や厨子の扉に西国霊場寺院の名前と番号が書かれています。それぞれの霊場本尊とお像の姿を比べると、いくつか一致しないものがあることに気づきます。

24番札所・中山寺の霊場本尊は十一面観音ですが、法泉寺のものは千手観音の姿をしています。単純に間違えて作ったと考えるかもしれませんが、実は江戸時代に作られた三十三観音像の写しにはよくあることで、当時の人が、何をお手本として仏像を作ったかによって、本来の霊場本尊との姿の差異が出てきます。

霊場巡拝の旅では、旅行ガイドブックや、各霊場本尊の姿を絵にしたものが一堂に印刷された一枚刷りの刷り物がお土産として持ち帰られていました。これらに載っている姿を見てみると、中山寺の本尊が千手観音として印刷されている物が多々あります。おそらく、法泉寺の三十三観音像は、こうした刷り物を元に制作されたのでしょう。

また11番、上醍醐は准胝観音が霊場本尊で、一面十八臂の姿でしたが、刷り物のほとんどが、上醍醐の本尊を「三面八臂の観音」と記しているため、文字通り三面八臂で作っていません。こうした仏像群を詳細に見ていくと、単なる写し間違いというわけではなく、江戸時代の仏師が何を手本に作っているか、造像背景を知る手がかりが秘められています。

※法泉寺・三十三観音像は非公開です

田島整「石仏の図像に関する一試論—伊豆の三十三観音石仏群の図像分析から—」(矢島新編『仏教美術論集7 近世の宗教美術』2015 竹林舎)



左：准胝観音坐像(11番上醍醐) 右：千手観音立像(24番中山寺) いずれも木造・玉眼・漆箔・彩色。伊豆市本柿木・法泉寺蔵

日本画の線はただ輪郭を表すだけではなく、対象物の質感や温度、動きなどさまざまな表現を生み出します。この日本画における線を厳しく追い求めた画家がいました。画家の名は、「線の画家」とも称される、小林古径(1883-1957)です。古径作品に描かれる美しく気品あふれる線は高く評価され、日本画の中で今でも際立った存在です。

古径の線への強いこだわりは、大正11(1922)年、彼が40歳のときに、日本画家・前田青邨(1885-1977)とヨーロッパに渡欧したことに始まります。約1年間におよぶ留学では、西洋美術の研究を目的としていましたが、もう一つ大きな事業は、大英博物館所蔵の《女史箴図巻》を模写することでした。古径と青邨は大英博物館に1ヶ月ほど通い、4世紀末の東晋の画家・伝顧愷之とされる《女史箴図巻》を、二人で手分けして模写しました。古径はこの模写作業において、中国古典絵画技法の最高峰とされる顧愷之の「高古遊絲描」という、絹糸のように一定の細さで伸びやかに描かれた線を習得します。この経験によって、古径は改めて「線」の重要性を見つめなおし、追求するに至ったと考えられます。

ヨーロッパ留学が大きな転機となり、古径は清澄な色彩に加え、東洋美術の伝統を踏まえた美しい線を画面に取り入れるようになります。帰国後に描かれた古径の代表作《清姫》(1930年、山種美術館蔵)や《髪》(1931年、永青文庫蔵)などには、研ぎ澄まされた線が作品に生かされています。

前置きが長くなりましたが、当館に新収蔵された《芥川》(1926年頃)、《道成寺》(制昨年未詳ですが、昭和初期に制作されたと考えられます)の2作品もヨーロッパ留学後に制作された作品で、古径の厳格でしなやかな線が冴え



小林古径《芥川》1926(大正15)年頃 絹本彩色、軸装 47.5×75.0cm

わたる作品です。とくに平安時代の歌物語である『伊勢物語』をもとに描かれた《芥川》は、若い頃から熱心に取り組んだ古典の研究と、突き詰めて追及した線描の凄味が遺憾なく発揮されています。

ここで少し、『伊勢物語』第6段「芥川」について簡単にふれましょう。

ある男が長年思いを寄せた高貴な女性をやっと連れ出し、暗い中を追手から逃げます。しかし、ひどい雷雨にみまわれたため、荒れ果てた蔵に女性を押し込みます。男が戸口を守り夜明けを待っている間に、蔵の中に鬼が現れ、女性は一口で食べられてしまいます。鬼に気付いた女性は悲鳴を上げましたが、雷の音にかき消されて男には届きませんでした。夜が明けて蔵を覗いた男は、女性がいなかったことに気付いて泣き崩れます。

この物語を題材に、古径は鬼が女性の前に現れた場面を描いています。女性は連れまわされた疲れからか、床に臥し休んでいます。白く透き通るような寝顔にかかる艶やかな黒髪、細やかな着物の模様を繊細な線で描き上げ、気品あふれる女性を表現しています。一方、

金髪を逆立てた恐ろしい形相の鬼は、上から女性を見下ろします。怪しい妖気を放つ鬼の姿は、今まさに暗闇から現れたかのような気配さえ感じさせます。薄墨で表現された闇の中から浮き上がる筋肉の盛り上がりは、面相筆の筆先を使って極細ですが非常に強い線で丁寧^{めいそうふで}に引かれています。闇の中に描かれた女性と鬼、古径が生み出した線はそれぞれの量感と生命力を見事に表現しています。画面の周辺に広がる余白は、見る者のイメージを膨らませ、闇の中に生き生きと物語を紡ぎだします。

古径は芥川や道成寺などの物語をしばしば題材にしています。それは古径が歴史画を得意とした師・梶田半古(1870-1917)に学んだことも影響していますが、日本の古典文学への興味・関心が高かったことを示しているといえるでしょう。古典絵画に触れたことで開花させた古径独自の造形美は、色彩も線も極限まで単純化された中に端正な美しさをたたえています。そして、なんとっても古径の一貫して妥協なき線が画面の中で息づいています。それは、清澄な色彩と相まって、見るたびに新鮮な輝きを見せてくれます。

上原美術館は、伊豆東海岸、河津町の全寺院の文化財調査を行い、うち彫刻では398体の仏像神像を確認、詳細な調査を行いました。

本像は2019年7月26日、河津町の東大寺調査で見出された像です。像高42.3cm。道元像と一対をなすため、曹洞宗を隆盛に導いた瑩山紹瑾の像と考えられます。ところで本像の曲棹(椅子)の座板裏を見て驚きました。「豆州三島宿/大中島町/大佛/安岡良運」の墨書があったのです。従来、江戸時代の三島に仏師がいたという情報はなく、興味深い発見です。なお三島以外では、江戸後期、安岡良運と名乗る仏師は二人が知られています。一人は18世紀後半に江戸人形町に住んだ仏師で、もう一人は幕末の19世紀後半、神奈川県横浜市、茅ヶ崎市、東京都町田市に作例を残す仏師です。三島は東海道の宿場町ですから、こうした仏師が何らかの理由で一時期三島に住んだ可能性もあります。安岡良運とはどのような仏師だったのか。今後の調査による作例の追加が楽しみな発見です。



美術館 周辺さんぽ ③

館庭にたたずむ夫妻の像



美術館の庭には、魚籃観音や蛙、鷲などさまざまな彫刻があります。仏教館入口近くには、それぞれ犬を連れた夫妻の銅像が立っています。当館へご来館くださった方の中には、この銅像の前で記念撮影をされた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

この銅像のモデルは大正製薬株式会社の名誉会長、上原正吉・小枝夫妻です。上原夫妻は、美術館の前身である上原仏教美術振興財団を1983年に設立し、現在の当館の元となるものをこの下田の地に築きました。下田の山間にある宇土金地区を選んだのは、小枝夫人の生まれ故郷を活性化し、地域貢献をしたいという考えからでした。

高さ約2mの銅像の正吉氏はまっすぐ前方を見つめ、小枝夫人は、正吉氏の少し後ろにたたずんで、わずかに笑みを浮かべています。その表情からは、夫人の故郷への思いが感じられるようです。ちなみに上原夫妻が連れている犬は日本スピッツで、「よく吠えるワンちゃんだった」という話が伝わっています。

なお、銅像は正吉氏が亡くなった3年後の1985年に建てられました。銅像の作者は、《平和の叫び》や《トーマス・ブレイク・グラバー之像》などの代表作がある富永直樹氏(1913-2006)。仏教館の仏像ギャラリーにも、同じく富永氏作の《聖観音像》(ブロンズ)がありますので、ご来館の際は、ぜひそちらもご覧ください。(櫻井)

出張授業

学校法人山崎学園 富士見中学校 2月25日

南伊豆町立南伊豆東中学校 6月10日

下田市立朝日小学校 6月22日

静岡県立伊東高校城ヶ崎分校 6月29日、7月1日

中学校は、京都や奈良で拝観できる仏像や寺院の紹介をしました。

高校では、美術鑑賞教育の授業として日本画の画材紹介や、実際に小さな色紙へ描く体験を行いました。

授業入館

学校法人静岡理工科大学 星陵高校 4月14日

伊豆市立修善寺中学校 5月17日

中学校、高校ともに仏像の見分け方や、当館のコレクションを見学しました。

調査

河津町内寺院 1カ所 3月6日

三島市内寺院・堂宇 3カ所 3月20日、6月21日

河津町内の寺院悉皆調査で、未調査分の調査を行いました。本調査で寺院調査は終了となり、今後、企画展等で成果を報告していく予定です。三島市では、各寺院、堂宇を管理されている方々、みしまのお寺めぐりの会のご協力により、3カ所の調査ができました。

展覧会協力

横浜市歴史博物館企画展『横浜の仏像』展 搬出入立ち合い

浜松市美術館企画展『みほとけのキセキ』展 技術協力

2館から依頼され、田島主任学芸員が展覧会協力を行いました。

横浜市歴史博物館主催の展覧会は、当館の調査から造像年代や仏師などが判明した、河津町・林際寺の仏像が出陳されるため、調査協力および搬出入の立ち合いをしました。

浜松市美術館主催の展覧会は、作品の搬出入、会場照明等の技術協力を行いました。

講演

浜松市美術館企画展『みほとけのキセキ』講演 4月10日

伊豆の国市文化財講座『北条義時連続講座』講演 5月15日

下田市寿大学開講式講演 5月19日

田島主任学芸員が3カ所で講座、講演を行いました。展覧会技術協力をを行った浜松市美術館では、企画展を担当した島口直弥学芸員と対談および、浜松やその周辺の仏像についてお話をしました。伊豆の国市教育委員会主催の連続講座は、「伊豆の武士と鎌倉仏」と題して講演を行いました。下田市教育委員会主催の寿大学の開講式では、「新発見!伊豆の仏像」という内容で二体の地藏菩薩にまつわるお話をしました。

国際博物館の日

ICOM(国際博物館会議)が博物館に親しむための活動として、5月18日(火)を国際博物館の日にしています。これを記念して、当館も当日は無料入館を実施しました。当日は多くのお客さまにご来館いただきました。こうした活動が美術館を知っていただくきっかけとなれば幸いです。



愛知県・普門寺の搬出の様子



伊豆だより



新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今年も下田市で行われる黒船祭は中止になり、少し寂しい5月が過ぎました。美術館が囲まれる山々は、新緑の美しい季節へと移り、とても気持ちが良い風景が広がります。

館庭の池は、前号で紹介した鯉の稚魚を、今年も卵から孵化させ育てています。シラスのような小さな姿の魚は、一年かけてゆっくりと成長します。池の周りでは、梅雨時にハナショウブが紫色の鮮やかな花を開き、池の左側には睡蓮が植わり、小さな可愛らしいピンクや白の花が咲いて、鯉たちの成長を見守っています。

ちなみに睡蓮が植わっている辺りでは、6月頃にヘイケボタルが飛び交います。年によって、蛍の数は変わりますが、美術館の隠れた蛍鑑賞スポットです。
(櫻井)

出品予定の展覧会



京都市京セラ美術館開館1周年記念展 上村松園

2021年7月17日(土)～9月12日(日) 京都市京セラ美術館、京都

リニューアルオープンしてから2年目を迎えた京都市京セラ美術館では、開館1周年記念展として「上村松園」展が開催されます。近代の京都画壇を代表する日本画家・上村松園(1875-1949年)の最初期から絶筆に到るまでの代表的な作品100点余りが集結します。松園芸術の全貌が紹介されるこの回顧展では、美人画家として名高い松園が描く気品あふれる作品が数多く紹介されています。重要文化財である《序の舞》(1936年、東京藝術大学蔵)と《母子》(1934年、東京国立近代美術館蔵)2点をはじめ、みどころ満載なのですが、100年ぶりに新発見された大正期の名作《清少納言》(1917-18年頃、個人蔵)も見逃せない逸品です。(会期中展示替えあり)当館からこの展覧会に上村松園《初雪》を出品しております。女性画家の心と眼でとらえた美しい女性像の数々を観ることができる展覧会です。
(土屋)

次回休館日は2021年9月27日(月)～10月8日(金)です(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

表紙写真：開催中の展覧会「陰翳礼讃」の展示風景。谷崎潤一郎旧蔵の小林古径《杪秋》が床の間に見立てた空間に飾られています。